

家庭—保育所—幼稚園

幼児の教育

'996



第98巻 第6号 日本幼稚園協会

倉橋惣三の「保育者論」

倉橋惣三が折にふれ書きとめた

「幼児の教育者」「保母諸君と語る」「教師論」からなる保育者論。

倉橋は保育者に何を望み、どんなことを期待していたのか。

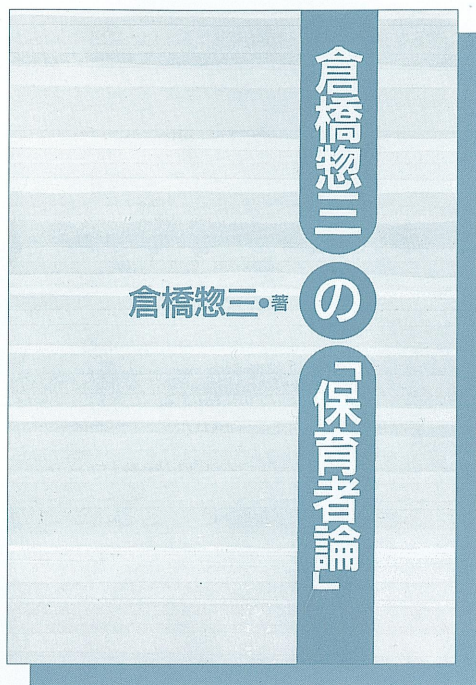
これから保育者を目指す人、今の保育に行きづまっている人、明日の保育を

よりよいものにしたいと考えている

幼児教育関係者におすすめしたい必読の一冊です。

発売中

好評既刊本！



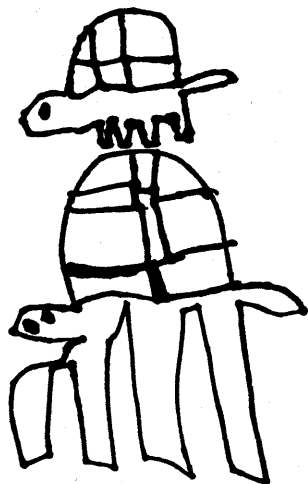
倉橋惣三●著

B6変型判 200頁 定価：本体1,300円+税

キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第98巻 第6号



幼児の教育 目次

— 第九十八卷 第六号 —

© 1999
日本幼稚園協会

巻頭言

親にとつての子どもの価値と子どもの教育…………… 柏木 恵子 (4)

特集へ支える

江戸庶民の生活を支えた近郊農村…………… 波多野 純 (7)

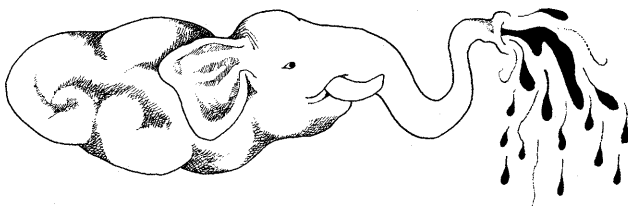
意識を留めて心を流す…………… 杉田多可雄 (12)

ともに揺れるブランコ…………… 鍋島 恵美 (15)

骨に支えられて…………… 酒井 朋子 (20)

「小金井かいわい」の二年…………… 佐藤 和代 (24)

アフリカで…………… 梶田 英郎 (28)



自閉症の子どもに特別な保育はあるか……………津守 真…(34)

コミュニケーション能力を考える(2)

「さく」ことからはじまる……………村松 賢一…(40)

保育現場からの現代幼児論(2) 幼児の攻撃性……………友定 啓子…(48)

子育ての探究 その二

飛鳥・奈良時代の古典に描かれた親子像……………柴崎 正行…(56)

表紙絵／北村 俊道

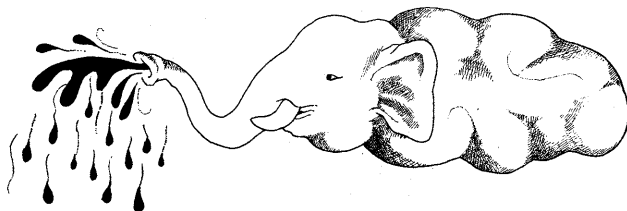
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「雨の素」

編集委員／田代 和美・吉岡 晶子・田中三保子

編集部／仲 明子



親にとっての子どもの価値と

子どもの教育

柏木 恵子

古来、「子どもは宝」といわれ、それを親たるもの誰も疑いません。そして子どものためにはできる限りのことをしてやりたい、それが私心ない親心、親の愛情だと思っています。しかし、本当にそうでしょうか？ このことについて、最近、考え直さねばならないように思います。

少子化がしきりに喧伝され、それは子どもの教育や発達上、問題だといわれています。



す。しかし、少子化はなにも今に始まったことではなく、かつてもあった——沢山子どもが産まれても病気で多数が死に、結局残ったのは二人という時代が東西どこでも長く続いていた、その意味で少子は決して初体験ではありません。それよりも重要なことは、産めば必ず育つようになったこと、そしてその結果、子どもを産むか否か、いつ、何人かを親が決めて産むことになったという変化です。「授かる」子どもから、「つくる」子どもへの変化で、これは親における子どもの価値の決定的な変化です。

このように、子どもの誕生——命が親の手のうちのものとなったことが、子どもを親のもちもの存在へと変化させたことは否めません。確かに親は子どものためにはできるだけのことをしてやりたいといい、実際、子どもの教育熱は高まるばかりです。子ども数の減少にもかかわらず、増大する育児／教育産業はその端的な例証です。しかし、その教育は、本当に子どものための教育になっているのでしょうか？

おむつもとれないうちから、水泳だ、英語だ、ピアノだヴァイオリンだと早教育はさかんです。少し大きくなれば、受験のための塾通いも珍しくありません。親は子どもによかれと思っ**て**しているのでしょうか。しかし、子ども自身がそれをどれほどしたい、ゆきたいと望んでいるかは大いに疑問です。子どもにはまだわからない、だから親が「よかれ」と思うことをさせてやる親心だというでしょう。しかし、子どもは特



別なおけいこよりも、身近なものや場所をあれこれ探検したり試行錯誤したい、自由に遊びたい。そうすることで思いがけない発見や自分で「やった!」という満足や自信を味わいます。そうした経験によって、子どもは育ちます。そうした自発性、探索の機会を封じてしまっているのではないのでしょうか。「つくった」子どもを、自分のもののように親の考えだけで子どもの世界と経験を限定し勝ち。それは「子どものため」といいながら、実は一種の自己愛の発露となっていないのでしょうか。

最近、「子育て」ということがしきりにいわれます。そこには子どもが育つことへの敬意が薄れ、親がなにかしてやるのが万能といった不遜な態度が窺えないでしょうか。子どもが親によって「つくる」時代に、陥り勝ちなこととして自戒しなければと思います。このような弊害をもつ親の教育の限界を、親だけによらずみんなの力で補完することが求められます。発達の主体である子どもが、幼少時から多くのおとな・子どものなかでみんなに守られ、社会のなかで育つことが必要です。その意味で、保育園や幼稚園の果たす役割は、今、大変重要だと思えます。

(白百合女子大学)



特集 〈支える〉

江戸庶民の生活を支えた近郊農村



波多野 純

熊さんの朝

熊さん、八さん。落語に登場する江戸庶民の暮らしは、多くの人、なかでも近郊農村に支えられて成り立っていた。大工熊五郎、日本橋に近い裏長屋に住む彼は、最近嫁さんをもらった。

九尺二間に過ぎたるものは

紅のつきたる 火吹き竹

(江戸川柳)

四畳半一間に流しと竈が付いた裏長屋の狭小な生活空間、その日暮らし、仲間の大工には田舎から親を呼び寄せたヤツも多い。そんな中で自分には嫁さ

んがきた。竈の火をおこす火吹き竹に口紅がついて
いるのを見て、思わずニヤツとしてしまう。

ニワトリの鳴き声にせかされるように、早々と目
を覚ます。手拭いを肩に井戸端まで出掛け、顔を洗
う。ひんやりとした水が心地よい。この井戸、地下
水を汲み上げているのではない。神田上水・玉川上
水つまり、都市施設としての上水道の水である。

猫の額ほどの裏長屋の井戸端には、このほか惣雪
隠あるいは惣後架と呼ばれる共同便所や、ゴミ溜、
お稲荷さんなどが設けられている。

いつもの習慣で、ついでに雪隠にしゃがむ。裏長
屋の大便所には扉が下半分しかない。しゃがんでも
顔が出てしまう。少し寝坊し遅くゆくと、お上さん
たちの井戸端会議とぶつかってしまう。新妻も仲間
だ。それでは出るものも出なくなってしまう。ここ
で出した排泄物は、近郊の村人が汲み取り、肥料と
なった。

部屋へ戻ると、ガチャンという音と嫁さんの叫び

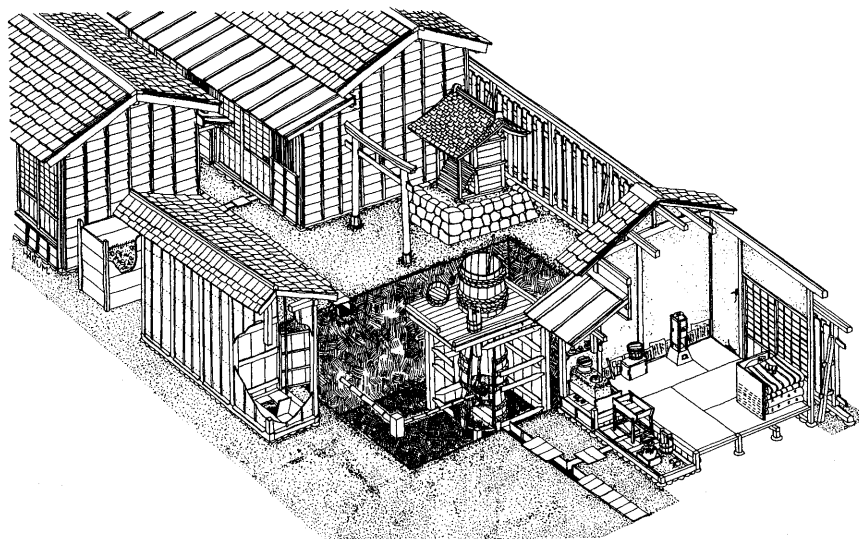
声。茶碗を落として割ったらしい。少しの割れな
ら、貼り付けて使うが、粉々になったものではどうし
ようもない。ゴミ溜に捨てる。ここに溜まったゴミ
は、まとめて舟に積まれ、深川の埋め立てに利用さ
れた。

お稲荷さん、小さな祠だが、毎日交代で油揚げを
供え、水を替える。江戸には、「伊勢屋稲荷に犬の
糞」と言われるほどに、お稲荷さんが多かった。

江戸の暮らしを支えた神田上水・玉川上水

裏長屋の各戸には、流しはあるが、上水は導かれ
ていない。飲み水や調理の水は、井戸から汲んでき
て、瓶に貯めて使う。したがって、野菜を洗うなど
調理の下ごしらえや、食器洗い、衣類の洗濯など
は、すべて井戸端で行う。お上さんたちは、一日の
うちのかなりの時間を、井戸端で過ごした。

この井戸には、神田上水・玉川上水の水が導かれ
ている。神田上水は井の頭池（東京都武蔵野市）を



▲江戸の裏長屋の一角…上水井戸・
雪隠・ゴミ箱・稲荷が並ぶ

波多野純建築設計室

水源とした。玉川上水は多摩川の水を羽村（東京都羽村市）で取り入れ、延々四〇数キロメートル、素堀りの水路で導かれ四谷大木戸に達した。そこから地中に埋設した水道管となり、石垣樋・石樋・木樋・竹樋などを使った網の目のような水路を通って、裏長屋の一角にまで達した。

時には、多摩川の魚が紛れ込むこともあるなど、必ずしも清潔な水ではなく、江戸時代中期以降には深井戸を掘るものも出たが、玉川上水が江戸庶民の生命線であることに変わりはなかった。玉川上水を開削した玉川庄右衛門・清右衛門に繋がる玉川家が、羽村の取水口や水路の沿線を管理した。近郊農村である小金井あたりには、護岸保護のために桜が植えられ、今も花見の名所となっている。玉川上水はまた、野火止用水など近郊農村の農業用水としても利用された。

この水が、裏長屋の井戸まで導かれる。井戸には底板があり、ゴミが沈殿する仕組みとなっている。したがって、井戸の水を干し、底を掃除する、井戸浚いは、長屋の住人が総出で行った。そこには、同じ釜の飯を食ったと同質の、同じ上水の水を飲んだ仲間意識が存在した。

村に支えられた糞尿の処理

長屋の住人の共同便所、惣後架で熊さんが出したウンコ。彼の尻を離れた瞬間から、彼のものではなく、大家の持ち物になった。屎尿は、肥料としての商品価値があった。大家さんは、長屋の住人たちの排泄物を、近郊の農家に汲み取りに来させ、その謝礼として、最初は野菜を、そのうちに金銭を受け取るようになった。

大家 店子の尻で 餅をつき (江戸川柳)

大家さんも店子の排泄物で儲けるのは少し気が引

けたのか、その収益を貯めておいて、年末に店子に餅を配った。年末には、大家さんと近郊農村のお百姓さんの間で、おかしなせめぎ合いが繰り返された。早く汲み取ってもらって、清潔にしたい大家さんと、なかなか汲み取りにゆかず、大家さんが値を下げてくるのを待つお百姓さん。と言って、大家さんが粘り過ぎれば、汚いままに年が明けてしまう、お百姓さんが粘り過ぎれば、他に売られてしまう。なんとも滑稽な駆け引きである。

江戸っ子の排泄物は、近郊農村で肥料となり、やがて野菜となって江戸へ戻ってくる。そこには、比較的分かりやすい、目に見えるリサイクルシステムが、成立していた。

紙は漉き返し、ゴミも埋め立てに

ゴミはどうだろうか。江戸のゴミは、現代と較べれば、かなり少なかったと思う。大福帳などの帳簿は、使い終わると裏返して、もう一度帳簿として使

われる。その後、故紙屋に買い取られ、多様に処分される。内容がおもしろそうなものは、古本屋に売られる。丈夫そうな紙は、接骨医名倉の膏薬張りに利用された。残りは、近郊農村に届けられ、一度溶かして漉き返し、落とし紙として、江戸へ戻ってきた。

食べ物のゴミも、魚の骨や貝殻など、ごくわずかであった。江戸のゴミの大半が、深川の埋め立てに利用されたことからすると、割れた陶磁器や瓦、崩れた壁土など、土系のゴミが多かったように思う。

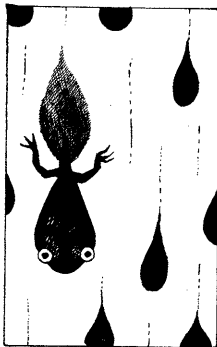
江戸では、ゴミ処理も、近郊農村の世話になっていた。

支えあう都市と村

江戸の飲み水は、近郊農村を延々と流れて来た水であった。排泄物やゴミも一度近郊農村で処理され、やがて野菜や落とし紙など暮らしたに役立つものに姿を変えて、江戸へ戻ってきた。

では、江戸は近郊農村に世話になりつ放しなのだろうか。そんなことはない。江戸には、都市にしかない多様な技術や芸をもった職人や役者がいた。その人たち、自分では米や野菜も作れなければ、ゴミの処理もできない。そんな、村なら穀潰しに過ぎない人々が生きられる場所が都市であり、それらの人々もつ優れた技術や芸が都市の魅力であった。都市と村は、たがいに役割を分担することで、支え合ってきた。

(日本工業大学／建築史・都市史)



意識を留めて心を流す

杉田多可雄

「首都圏のダイヤモンドのような町」と作家の打木むらじさんに言わしめたまち、飯能。東京のターミナル駅である池袋から四十分、首都五十キロ圏内にありながら入間川を中心にした清流と、江戸の町づくりとともに栄えた林業。きれいな川と深い緑の町はまさにきらりと首都近郊に光るまちだ。

私がここで育った頃は周辺の自然がそのまま遊び場だった。学校から帰るとカバンを家の中に放り込

み、体は家に入りもせずそのまま山や川に遊びに行った。川の中で泳いでいると足をちよんちよんとウグイやヤマメがつつく。山の中でチャンバラごっここの刀を作るためにホウの木を切って怒られたり、冬の朝早くメジロ取りに行く道すがらいモ畑でイモを拝借し、メジロ待ちの間に食うその焼きイモのうまさ！ けて私はガキ大将でも図抜けた腕白でもなかったが、この町に育てば、その程度のことには誰

でも経験することだ。同じく打木むらじさんの本の中に「よい景色を見るだけでおなかのくちくなるような子供……」とあるが、まさにこの町で育つ子はそうであつたと思う。私は飯能が好きだ。数日このまちを離れ、帰ってくるようなとき、飯能の町並みと山並みが見えてくるといまだに胸が熱くなる。きつこの自然の中にとっぷりと浸りながら育つた影響が大きいせいだと思つている。

飯能の周辺の山は共有林が多く、そこにゴルフ場の開発が押し寄せた。個人で持つていてもなにもならない共有林の権利が、世帯当たりかなりの高額で買つてくれるなら誰でも手放したくなる。一方都市計画区域外だつた奥地の地域は、格好の建て売り開発の対象となり山の谷間深くまで住宅が建つようになった。かくして林業の成りたなくなつた山は荒れてしまった。いつの間にか川は遊泳禁止となり子どもたちは学校のプール以外では泳げなくなった。観光客だけが川に入り、ゴミとたき火の跡を残して

ゆく。山にも川からも飯能の子どもたちは姿を消した。それでもなお緑濃く、川は黙々と流れている。

もつと子どもたちを飯能の自然の中になつぷりと浸けてやりたい。川の魚たちと遊ぶ、こそばゆいちよんちよんの感触、山の草をかき分けての「おつとばしっこ」（おにごっこ）とむせ返る草のにおい。その楽しさを体験すれば飯能が好きなき子が育つ、飯能が好きなき人が多く育てば育つほどこのまちはもつとすてきに輝きを増す。

そんな思いがつのつて「飯能緑の少年隊」を作つてから早くも十五年が経つてしまった。別に頑張つて支え続けたような感覚は全くない。好きなことをやらしてもらつている間に、さらさらと時間のほうが勝手に進み、十五年となつた、そんな感じだろうか。

自然であるということの大きな特徴の一つに「輝いている」というのがある。自然の中では何でも輝いている、比較が無くどれでもそれなりに輝いてい

る。草も木も石も皆それぞれに輝いている。普通の石も、ダイヤモンドも自然の中では同じ。違う位置付けをしたのは勝手に人がそう比較、認識したからにすぎない。いずれのものもすべて輝いている。比較がないということはそのものをあままに認識するということ。何かと比較をしたとたんに人は無意識のうちに位置づけを行う、より上とかより下とか右とか左とか。そしてそのとたんに本来の輝きが見えなくなってしまうようだ。

私にとって飯能緑の少年隊はほかと比較するものではなく、そのまんま丸ごと緑の少年隊だ。ボーイスカウトでもなく、スポーツ少年団でもなく、他の緑の少年団と競い合うのでもなく、ただただ私がそうしたいと思いつけた空間である。だから額に汗して支えているという自覚症状は全くない。

もちろん毎年運営上の障害のようなものはたくさん発生する、それはその面白さとして流してゆくだけ。障害に囚われ、とらわれた瞬間に面白さと捉え

られなくなる。たとえながあっても「おもしろいことになってきた」と捉えれば流せるようになる。そうすると「頑張る」が無くなり、肩の力が抜けてついでに「支えている」という思いもなくなってしまう。意識は留めて心は留めない、これが支える極意とでもいうのだろうか。おかげさまで今では子どもたちの直接の指導は若い人たちがやってくれるので、わたしはもっぱらビールでも飲みながら隊の活動を眺めている。

これからの緑の少年隊の夢。できることなら飯能周辺の林業を活性化させたい。かつては西川材として江戸の町づくりで栄えた林業は、木材そのものの需要がない中、あえぎながら何とか一部の情熱を持つた人々の手により、続いている。

木材本来の特徴である活人住宅の良さを分かってもらい（私は新建材だらけの今の住宅は殺人住宅と考えている）需要を広げ、林業も含めた新しい木材のサイクルができないだろうか？ そのサイクルの

一部に緑の少年隊が役に立つことができれば、ますます輝くまちづくりができる。

に開放たれている。

(飯能緑の少年隊事務局長)

輝く人、輝くまち、輝く地球、……ドアは一直線

ともかく揺れるブランコ

鍋島 恵美

幼稚園という生活のなかに子どもたちがやってきた時、その新鮮さに、ワクワク・キラキラ心を踊らせ目を輝かせる子どもと共に、ドキドキ・オロオロ

目を伏せる子どもの姿も感じます。『支え合う』とは、どんなことなのか幼児とともにある生活から問い直してみようと思います。



おかあさんとともに揺れる

一九九七年の春、私は四歳児を受け持ちました。

その中にいるA夫は、三歳児の生活を他園で過ごしました。「先生、今まで迎えるのバスに乗ってでかけていたのに、今になってどうしてでしょうか」と、A夫の母は、幼稚園に来てぐずるわが子の心を察しかねて困っています。私は「新しい環境にAちゃんの心が、グラグラ揺らいでいるのと違うでしょうか。その心が落ち着くまで、焦らずにいきましょう。

一緒に傍で遊んで下さっていいですよ」と、伝えました。A夫には、今は保育者でなくおかあさんが必要なのです。このことをA夫の母に、納得してもらうことは難しく感じました。元気に遊ぶ子や保育者に親しむ子の姿を見ながらわが子と遊ぶおかあさんの心は、早くわが子も……と揺らいでいたに違いありません。おかあさんの目が、羨むように他の子どもに向けられている時、「おかあさん、Aちゃんと

一緒にこっちへ来て遊びませんか？」と母子の心が外に向くように誘ってみました。おかあさんも「はい」と、素直に応じて下さいました。

秋の頃、母と保育室の前まで来て、そこで別れるようになりました。幼稚園の環境に慣れ、保育者も頼れる人として思えるようになったのでしよう。毎日の送り迎えや育友会（父母の会）の行事を通して、おかあさんにも仲良しの人が出来たようでした。

私と揺れる　　～Aちゃんいるよ～

A夫は、自分の持ち物を始末するのに、ずいぶん時間がかかります。彼にとつて、身辺の自立が心の自律につながると思います。ゆっくり待ちました。声や表情に出すことの少ない彼が、何に心を動かすのか、そつと見守りました。周りの子どもが、ハイテンポに行動する中で、みんなの中にA夫の存在が消えないよう、特別視されないようにA夫にかけるこ

とばや行動に気を配りました。彼は、描いたり作ったりすることが好きで細かいことにじつくりと打ち込んでいます。好きなことをつぎつぎと見付けては、楽しむ子どもの多いなかで、彼の存在が貴重に思えました。S夫・Y子から、神輿作りが始まり、A夫に「お祭りの飴作って、お店しようか？」と誘い、一緒に作って店を出しました。今度は、私も神輿衆になり傍にいる子どもに、「Aちゃんの飴、おいしそう。買いにいこう」と、声をかけやりとりの生まれるきっかけをつくりました。元気のいい神輿衆の子どもは、「飴ください」と。その勢いに押されがちのA夫ですが、きちんと一人ずつに手渡しています。そのようなことから、A夫の心が開かれています。これから色々なことを吸収していく力があることがわかりました。

虫探しの探險が始まりました頃、「A君」と、S夫からの呼び掛けを耳にするようになりました。私もS夫の声を耳にした時は、「Aちゃん、Sちゃん

が探していたよ」とA夫に、S夫には「Aちゃんいるよ」と、双方の「心の糸」をつなぎながら、彼らの関係を育みたいと考えました。S夫とは、母親同士が仲良しのことも、きっかけになったようです。虫好きで、虫のことをよく知っていることが、虫探險に集まる子どもたちに、A夫の存在感をクローズアップしていきました。

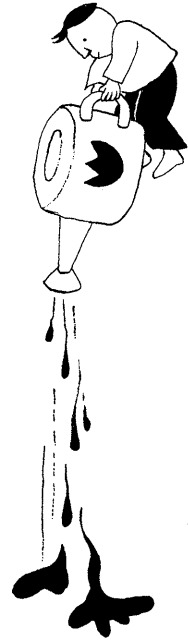
友と揺れる

一九九八年の春、五歳児の保育室は二階。A夫も母と別れて保育室へ来ています。

A夫は、プール遊びは苦手です。「おいで」と、声かけてもイヤイヤと首をふります。それに気付いて、S夫が「A君おいで……そつとここからおいで大丈夫やで」と、手をさしのべると、A夫がそのようにプールへ入ります。目を洗う時も、「Aくん、ここで洗い」と、水量の加減もしてやります。彼らの間に育まれている絆を大切に思う反面、S夫の優

しさと、それに支えられるA夫の関係が、おかあさんと子どものもので、「彼らの関係は対等なのかなあ……」と、A夫の自律を思い考えさせられる頃でした。

秋の頃、「昔（昨年のこと）したなあ」と、神輿や店作りが始まりました。A夫は、鯛焼き屋を始めました。U子やT子が「寄せて（入れて）」とききました。カマキリの赤ちゃんの誕生から、カマキリ探険をT子・B夫とともに始めました。この頃になると、A夫の関心事に他児が仲間入りして、その子どもたちとともに行動し始めました。A夫の心が能動的に動き出しました。保育室で始まったK夫との遊



びがきっかけになり、みんなで虫ごっこが始まりました。私も積極的にその中で遊びました。園庭のイチョウの落葉の中に、A夫は、鉄棒を運びゴザを掛け、スズメバチの家作りを毎日繰り返しました。彼の周りにカブトムシやカマキリなどの家も建ち虫の住む村のようでした。その中で、A夫が初めて喧嘩をしました。家作りでT夫と互角に争っています。「いいぞ……頑張れ」と、私は心の中で応援しました。とうとうA夫が、声をあげて泣きだしました。相手に自分を思い切りぶつけています。しばらくして、T夫と仲直り。彼らで妥協案を見つけました。またある時は、「スズメバチさん、大変！ カブト

ムシさんが戦っています」と、その仲裁を頼むと、両手を羽のように動かし素早く飛んでいき威嚇します。その行動は、普段と違い機敏です。好きなものになりきって遊ぶことが、彼に勇気と力を与えるのだと感じました。A夫は自分の生活に充実感を持ち始めていました。一方、S夫は仲間のなかで自分の思いが通じず淋しさを感じていました。S夫から「何してるの？ あそぼ」と、A夫に声をかけることが増えてきました。A夫は「いいよ」と寄せてやります。S夫は、A夫と遊ぶと元気になるのか、また元の仲間のところへ行ったりしました。A夫とS夫との関係が変化し始めバランスがよくなっていくようでした。A夫は、仲間の中でしっかりと自分を確立し自信をもち始めていきました。

ともに揺れる

自分の好きなことをゆったりとしたテンポで十分に楽しむA夫。そこにかかわる子どものトキは、カ

チコチと足早。しっかりと地に立つには、自分の心が納得できるまでじっくりと時間があるのではないかな……。周囲の足早に過ごしていく子どもも、いつかそのトキが必要になるのかもしれないと、A夫との出会いのなかで再考しています。A夫は、初めはおかあさんに、そして、保育者に好きな友達にと信頼を寄せる人の輪を広げ、支えてもらいながら心を安定させました。今では、S夫もA夫がいることで支えられ、実は私も保育する心を支えられているように思います。支え合うということは、自分が自分なりに立っていて、立っている人同士がともに揺れることではないのか……。A夫の心とともに母が、私友が揺れていたように……。それは、ともに揺れるブランコのようなしなやかな力のように思えるのです。

（京都教育大学教育学部附属幼稚園）

骨に支えられて

酒井 朋子

「私は整形外科を専門としています」そうお話しす

ると、「ああ、目を二重にしたりするんですか」とか「脂肪って吸引できるんですか」と聞かれることがあります。多くの方が、整形外科を、テレビで宣伝している「美容整形」と、勘違いされているようです。整形外科という科は人間の体の中でも骨と関節を対象としているものです。ですから外来には骨折した子ども、関節の変形により腰痛のある老人やスポーツで膝の靭帯を痛めた青年などが来られます。

す。

整形外科でまず行われる検査といえば骨のX線写真です。我々はいつも骨のX線写真と睨めっこしています。一枚のX線写真のなかには様々な情報が詰まっております、いろいろなことを考えさせられます。

「あいつは骨のあるやつだ」「骨抜きにされた」というような「骨」を使った言葉がありますが、骨の役目とはまず人体を支えるということです。われわれの体重を毎日支えているわけですから大したもの

です。

骨は人体の組織であり、皮膚や他の臓器と同様に、生きています。骨は毎日自分を自分で壊しては作り直しています。ですから子どもは身長を伸ばすことができますし、万一骨が折れてしまってもまた治すことができるわけです。

骨折というものは文字道理、骨が折れるわけですが、正確には生理的な連続性が絶たれた状態を呼び、いわゆる「ひび」と呼ばれているものも骨折に含まれます。

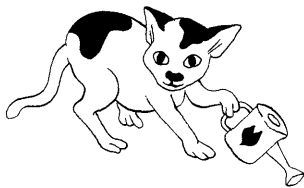
骨折はいろいろな原因で起こります。隣のお兄さんがバイクで大腿骨を骨折したり、子どもがジャングリズムから落ちて腕を折るのが一般的ですが、難産のため産道を通過する際、赤ちゃんの鎖骨にひびが入っていたり、風邪でひどい咳をして肋骨にひびが入ったり、というようなこともあります。いろいろなことで骨折が起こるわけですが、多くは自然と治ってしまいます。場所にもよりますが、四週間も

すれば骨自身が癒合して痛みがなくなります。

ここまで読まれて、骨が自分で治るなら整形外科の医者はなんと楽なことか、と思われる方もおられると思います。それはその通りですが、もちろん我々の仕事も必要ではありません。

骨折は、ずれのないものがある一方、ひどくずれを生じているものもあります。時に骨が皮膚を破り外から見えてしまっているものもあります。一般に骨折の治療というとまず、ずれた骨をもとの位置に戻し、(整復)、骨折部が動かないように維持(固定)

するということです。固定はギプス固定が有名ですが、嚴重な固定を必要としないときは簡単な副木、絆創膏固定等にとどめることもあります。ずれがひどいときや安定性の悪いものに



は、時に、手術による整復、ネジやプレートによる固定を必要とすることもあります。

整復がうまく行かないと変形を残してしまいますし、固定が悪く骨の間に動きがあると骨癒合がうまく行きません。いつも我々を支えてくれる骨も、骨折を起こした時には、よい位置に矯正し、治るまで支えてあげる必要があります。〃骨休め〃という言葉があります。骨は良い環境を与えてあげることの良い骨癒合が得られます。

骨癒合と言ってもその経過は骨折の状態、年齢、全身状態などにより、様々です。

骨折と診断されて、〃私は年だから骨がつくのも遅いでしょうねえ〃などと嘆かれる女性もあります。が、そんなことはありません。三十キロ程しかないような小さな九十歳のおばあちゃんの骨にも、治る能力は詰まっています。老人は布団につまづいて転んだり、などという小さな力でしばしば大腿骨骨折を起こします。その際は多くの場合、寝たきりにな

らないように手術を行います。が、経過に問題がなければ骨は必ず癒合します。しっかりと固定ができればいくつになっても骨癒合が得られます。この事実には我々も勇気づけられます。日頃の自分の能力のなさに落ち込んでも、鏡のなかに白髪を見つけ、年を感じても、まだまだ捨てたものではありません。年齢に関係なく人間には自分自身を直すという、自己修復能力があるのです。

しかし、逆に子どもの力には我々大人は、かないません。実際、子どもの骨癒合には目を見張るものがあります。子どもは大人と異なり、二週間もするとX線写真の上では、骨折部の周囲に〃化骨〃と呼ばれる幼弱な骨がみえはじめ、みるみる骨がついてしまいます。〃最近、子どもが手を動かさなくて、なにかおかしいんです〃と云ってお母さんが子どもを診察室につれてきた頃には、もうすでに骨がつき始めていることなどもよくあります。成長期の骨は代謝が速く、維持するのが目標の我々大人の骨と

は、根本的に持っている能力が違います。こんな力を知らず知らずの間にどこかに失ってきてしまったかとふと寂しさを感じるときもあります。

我々は、時にこの子どもの能力を恐ろしく感じさせられることもあります。成長する骨においては経過がよくないとき大人では有り得ない問題が生じることがあります。矯正が不十分で、成長線が乱れ、関節が変形して出来上がった、左右の長さが違ってしまったりしてはなりません。子どもの骨は正しい治療に対しては期待以上の答えを出してくれます、逆にうまく行かないときの結果は、成長が起るだけに、恐ろしいことがあります。まだ出来上がっていないもの、可塑性のあるものへの恐怖を感じる時もあります。

骨はじつに正直なもので、よい位置に矯正し、良い支えを与えると、骨は我々に必ず応えてくれます。しかし必要以上に骨を甘やかすのもよくないようです。長く固定しすぎると関節が硬くなり動きが

悪くなりますし、長く体重をかけないと骨は頑丈である必要を感じなくなり弱くなってしまいます（廃用性萎縮）。支えであるという役目を忘れ、強固であろうとする努力を止めてしまうのです。

レントゲンを眺めてはあれこれ悩むことが多い毎日ですが、骨の誠実さには頭が下がります。一生を通じて骨は常に我々を支え、自分を見つめては、ここつと自分を直し続けているのです。診察室で我々はいろいろ考え、骨を折っている。つもりですが、我々の努力とは別に、案外、骨は骨で勝手に、自分を直し、我々はその結果をみて喜んでいるだけなのかも知れないとも、思うのです。

（東京医科歯科大学）

「小金井かいわい」の二年

佐藤 和代

都心からちよつと（だいぶ、という声もある）はずれた、小金井市。この地に「小金井かいわい」ができて二年になります。ここは会員制の助け合いシステム。老人の介護を中心に、家事やベビースーツなど、生活の中でちよつと助けがほしいとき、気軽に頼めるところを地域の中につくろう、ということが発足したものです。

手助けがほしい会員は事務局に依頼します。事務局のスタッフがくわしい内容をきいた上でケアス

タッフ（手助けする人）に連絡し、双方が合意すれば手助け開始。ボランティアではなく、自給が支払われる「仕事」としての、手助けです。

と、それだけのシステムなのですが、説明するの、それだけの人は「よくそんなのつくったわね」と言います。「頼む人なんているの？ 働く人集まる？ 事故でもあったらどうするの？」。

はじめて計画を聞いたときは私だって少々危惧していましたが、ふたをあげたら依頼は毎月増えるば

かり、事務局スタッフが「受話器を置く暇がない！」と悲鳴をあげること。介護や家事を気軽に頼めるところがあつたら、と思っている人がいかに多いか、実感したこの二年でした。

さて、私はここで働いているわけではないのですが、ずっと会報づくりのお手伝いをしています。依頼者やケアスタッフにお話を聞きにいったり、手紙や感想文を読ませてもらったりと、現場からちよつと距離をおいたところから「小金井かいわい」にかかわってきました。その中で出会った人たち、出会ったできごとについて、少し紹介したいと思います。

はじめてのインタビュアーに伺ったのは、依頼者の第一号の、九十歳代の女性のお宅。この女性、身体は不自由ながら、なんとシャキツとしていること！若い頃は画家を目指して勉強していたそうで、〇〇

さんはね、あのとき〇〇先生がね、と何気なく口にされる人が、美術史の教科書にのつてるような人物ばかりだったりして。うーん、このマンション（私の家のすぐ近くで、いつも前を通っていた）はこんな人を抱え込んでいるのだ、と妙に感心して帰ってきました。

このお宅に入っているケアスタッフが「介護って、暗くもないし、きたなくもない仕事なのよ」と言ってたけど、本当。老人介護のイメージがちよつと変わりました。

もちろん明るい話ばかりではない。痴呆のある方をかかえている家族など、本当に困つてから人を頼む、といえます。ケアスタッフが行つてみると、よく暴れて手がつけられなくなるという痴呆症のご老人がいて、ふすまも障子もボロボロだった、というケースも。

でも、ここにはいったケアスタッフは「私は痴呆のある人の介護が一番好き」と言っていました。痴

呆のある人は、感情的にはとても豊か。だから、その方の空想（妄想）の世界につきあって、話をあわせながらお世話をするのは楽しい、のだとか。もと教師だったその方が、ケアスタッフを生徒扱いされるので、ずっと生徒のふりをして通したそうです。話をとことん聞く、間違いを指摘しない。徘徊されるときなどは少し離れてついていく。そういうことは家族には難しいけれど、他人ならできます。それで問題行動はだんだん減るものだし、家族の方には喜ばれるし……だから好きなの、と言っていました。

このケアスタッフだけではなく、働いている人からお話をうかがうと、何となく平和に暮らしている（？）私など、いつも頭の下がる思いです。痴呆の老人をかかえて十年以上苦労したから、そういう方のお役に立ちたいと思って、という人。家事だけのつもりで入ったけれど介護の大切さに気づき、本格的に勉強を始めたという人。

あるスタッフは、息子さんを筋ジストロフィーで亡くされた後、この仕事を始めました。大きな体の息子さんをずっと世話してきたこの方、お年寄りを軽々と車椅子に移して介護されています。

「主婦が自分の都合のいい時間だけ働くななんて、仕事というものを甘く見ている」という批判を時々耳にします。でも、ひとりひとりのケアスタッフを見ると、なんのなんの、企業でバリバリ働く女性に（男性にも）ひけをとらないわよ、と思うのが。

少し話が介護にかたよりすぎたでしょうか。実は依頼される仕事の中で「介護だけ」というのは少数。一番多いのは介護と家事を両方やって、という依頼です。公的機関から派遣されるヘルパーや看護



婦さんは、原則として家事はしないことになっていきます。訪問看護の方がきて、シーツを換え、清拭をされて、さっぱりした。……のはいいけれど、さてそのシーツやタオルの洗濯は誰がするの？ いきおい、民間のグループから派遣されるスタッフには家事を頼むことになるようです。

「食事の支度をお願い。老人食と、ついでに家族の普通食も作って」。

「腰が痛くてふき掃除ができないので、掃除だけ頼みます」といった依頼がよくはあります。

そして、まったく介護と関係のない依頼も山ほど。会報には、「今月こんな手助けがはりました」というコーナーがあるのですが、ここからちよつと抜粋してみます。

* 独り暮らしの男性宅で、料理づくり。一度にたくさんつくって、冷蔵庫にいれていく（外食って、あきますよね……）

* 赤ちゃんを、朝病院に連れていってから保育園に

送っていく（通院が長引くと、毎日遅刻してばかりはいられない。切実です）

* 旅行中の犬や猫のお世話（動物好きのスタッフに人気の仕事）

* 主婦が入院している間の家事全般（うんうん、我が家だつてきつと困る）

* 二年間そうじしなかつた部屋のおそうじ（！）

* 小学校の移動教室の説明会に代理で出て、報告書を書いてわたし（……）

* 夜間のトイレ介助（泊まり込み。たまには家族もぐつすり寝たいですね）

ほかに、引越し手伝い、通訳、ワープロ打ち、衣類の手直し……。手助けしてほしいことっていろいろあるものだと感心してしまいます。

「小金井かいわい」の便利屋稼業、フットワーク軽く、今日もかいわいを走り回っています！

アフリカで

榎田 英郎

私は今、アフリカ大陸の真ん中にあるカメルーンという国で、眼科医として医療奉仕をしています。

一九九四年の一月、勤務していた病院を定年退職するにあたり、自分の第二の人生を、私を一番必要としてくれる人々と共に働きたいと考えました。そして、発展途上国の人々が、先進国と同様な眼科の医療を受けられるように、現地の医師を教育するという奉仕の道を選び、カトリックの信徒宣教師とし

ての研修を一年間受けました。その研修期間中、私のことを知ったイタリアのカトリックのボランテイアグループ、C O E (Centro Orientamento Educativo) からカメルーンに来てくれないかとの打診があったので、その年の秋、現場を見に行きました。

首都のヤウンデには、この国唯一の医科大学があり、一学年七十人位の学生がいるようですが、眼科

の機械も充分にはなく、専門教育はほとんどできていないようでした。人口一、三五〇万に医師が二千人位、そのうちの眼科医は外国人も含めて十二、三人というのが当時の状況でした。大きな町には公立病院があつて、広い敷地に各科の建物が建つてはい

ますが、設備は、私が眼科医になつた三十数年前に日本で使われていたものが並んでいて、病院によっては医師が不在で、看護婦が相談に乗っているところもありました。ほとんどの病院は、眼科の診察室はあつても、診療はしていないようでした。COEは、首都の約七十キロ南にあるバルマヨという町で、学校経営の傍ら、小さな診療所を持っていて、そこではカメルーン人の医師が一人と何人かの看護婦が働いていました。その診療所に新しく眼科を開いて、カメルーンの前を指導してほしい、日常の必要経費、住む部屋、食事、および年一回日本に帰る交通費とわずかな小遣いはCOEが負担するが、診療に必要な機械類は日本から持つてきてほしい、

というのがCOEの希望でした。着任はなるべく早く、ということでした。

一概に眼科の診療機械といつても、新しく買うにはかなりの資金が必要です。しかし私には、求められているところでその必要に應えたいという気持ちはあるものの、資金的なあては全くありません。どうしたらよいかわからないままに、時間はどんどん過ぎていきました。ところが、そんな途方に暮れた私の事情を知つた開業している先輩後輩から、使わなくなつた機械があるからと寄付の申し出がありました。また、癌の告知を受け、開業していた医院を閉院することにした先輩が、亡くなる前にその医院の機械と器具全てをカメルーンのためにゆずつてくださいました。さらに、眼科の機械を扱っている会社からも、白内障の手術器具、眼内レンズ、ゴム手袋等、たくさん物の寄付があり、このような善意によって、何かと基本的な診療に必要な機械が揃うまでになつたのです。さらにこれらの機械類を現地

まで輸送するための経費も必要ですが、所属する教会で「カメルーン医療援助基金」という窓口を作ってください、ここにも多くの方から援助をいただいたおかげで、最初のコンテナを運ぶ費用ができました。これらのことがなければ、私の奉仕はとても実現不可能なことでした。今、「支える」という特集テーマのこの原稿を書きながら、まず思い出すことは、家族をはじめ、多くの人々に「支えられ」て、この奉仕が成り立っているということです。

こうして私は、一九九五年春、カメルーンに着任しました。

カメルーンに着いて最初の仕事は、カメルーンの医師免許と滞在許可を取ることでした。この国は、大部分がフランスの植民地だったところですが、西の一部にイギリスの植民地だった部分があるために、英語とフランス語が公用語になっていて、履歴書等の書類は英語でもフランス語でもよいので幸い



しました。何しろ、私のフランス語は、カメルーンに来ることが決まってから、まさに六十の手習いで始めたものですから、到底実際の役に立つようなものではないのです。医師免許は、日本の医師免許証に、日本大使館で作ってもらった証明書を付けて手続きをしました。医師免許の方は三ヶ月くらいおりましたが、滞在許可は、翌年の五月になってやっと五年間の許可がおりました。この手続きにも色々な人の助けが必要でした。

船便でコンテナがつくのを待って、機械を組み立

て、診療ができる状態になるのにも数ヶ月かかりました。機械を組み立てている最中にも患者さんが来て、やっと組み立てた機械を使って、梱包を解いた箱の散らかっている中で、最初の診療をしました。

診療を始めてまず困ったのは、やはり言葉の問題です。私のいるバルマヨはフランス語圏で、英語の通じる人がほとんどいません。イタリア人と一緒に作った予診票を渡して患者さんに書き込んでもらうので、来院の目的はわかるのですが、視力検査の段階で、輪のどこが切れているかを答えるように説明するのに一苦労です。イタリア人が書いてくれたフランス語を読みながら説明しますが、なかなか通じません。代わりにカメラマン人の看護婦に説明してもらおうとしても、看護婦自身が眼科の経験がないのでうまくいきません。仕方なく視力検査室に長椅子を持ち込んで待合室にし、待っている間に他の人の視力検査の様子を見せることにしました。これは効果があったようで、何とか視力検査はできるよ

うになりました。以前から診療所にいた医師とは英語が通じるのですが、彼は一般外来が終わらないと眼科には来ません。英語のわかる看護士を一人雇ってくれたのですが、彼は眼科に興味がないらしく、他の用事を見つけてはどこかに行ってしまうので、結局私一人で診察をすることになります。この国では、患者さんが手帳を持っていて、医師が診療内容、診断、治療を書き、それを持って患者さんが薬局に行つて薬を買う制度になっているので、手帳を患者さんに返すときに書いたものを見せながら説明すると、何人かは、私のフランス語でもわかるようです。しかし大部分の人は、手帳を持って看護婦のところに行つて説明を受けているようでした。医師のいるときには彼が説明してくれます。この国には二百位の部族があつて、それぞれに固有の言葉を持っているので、年寄りでフランス語の話せない患者さんは、カメラマン人の医師とも話が通じないようです。そんな状態での診療がしばらく続いています。

した。その後、一般外来のためにルワンダ人の医師を一人雇い入れたので、最初からいた医師が眼科を専門に勉強できるようになったのですが、彼は、やりたいことがあればそれを優先して、眼科は気が向けば習いに来るという状態で一年が過ぎました。

二年目からは、看護婦が一人、眼科の専属に入りました。この国では医師数が少ないために、看護婦も医師と同じように、患者さんの話を聞いて診断し薬を処方する仕事をします。彼女も将来は眼科の仕事をしたという希望だったので、この国の事情も考えて、看護婦にも眼科診療を教えました。この看護婦はとても熱心で、わからないとすぐ聞きに来るし、お産で休んだ以外は欠勤もなく、一年の間に、眼科の診断に関しては初めからいる医師よりもはるかに正確になりました。医師の方は診察はあまり好きでないようでしたが、手術には興味があり、初年度から少しずつ執刀させたので、二年目の終わりに白内障の手術はかなりうまくなり、眼内レンズの

挿入も無難にできるまでに成長しました。二年目の途中からは医師が一人増えて、彼も仕事の合間には眼科の勉強に来るようになりました。カメルーン医師二人の診療体制になってから、看護婦は診察をやめ、検査を主にするようになりました。一九九八年の四月（三年目）からは、眼科のために一人看護婦が増えて、カメルーン人の医師二人、看護婦二人の診療体制が出来上がり、私はもっぱら指導の仕事に専念できるようになりました。一方、患者さんの数も増えて、首都はもちろん全国から来るようになりました。しかし遠くから来ることができる患者さんは、カメルーン人の中でも金持ちです。

バルマヨでカメルーン人による診療体制がかなりできて、私が常時いなくても大丈夫になってきたので、四百キロほど西のチャンという町のカトリック病院からの要請に応えて、そちらの指導も始めることにしました。その病院の看護士を三ヶ月間バルマヨに呼んで眼科の基本的な指導を行い、その後、月

に一週間程度診察に行くことにしました。こちらから出かけていかないと、本当に貧しい患者さんが受診できないからです。今は、チャンへの出張診療と指導も軌道に乗りつつあります。

一方、大きな難問もあります。日本での専門教育は、初めの一年はこれを教えて二年目はこれ、というように年次を追った教育体制ができていて、教える方も教わる方も、それを当然のこととして受け入れています。しかし、専門教育の制度ができていない国では、こちらの教えたいことと、相手の習いたいこととは必ずしも一致しないのです。診断が充分にできない医師が手術をするのは非常に危険なこと

ですが、現地の医師が求めるのは、時間のかかる病気の診断の知識よりも、手術の技術の習得です。私が診療に立ち会っているときは、診断の段階で、手術の適応があるものか、やっても患者さんに負担がかかるだけで効果は少ないから患者さんとよく相談

して決めるべきものか、手術の適応はないものか、等のチェックができますが、私が休暇で日本に帰っている間に、現地の医師にはまだ無理な手術が行われていたり、時には、それが誤った診断の結果行われた手術であつたりすることもあります。そのようなことの無いように注意はしても、それに従うかどうかは相手の気持ち次第です。

「支えること」、それは相手の自立を援助することなのだと思いますが、そこには切り離すことのできない、基盤としての教育の問題が大きくかかわっていることを痛感しています。途上国の援助の難しさを感じさせられている今日この頃です。

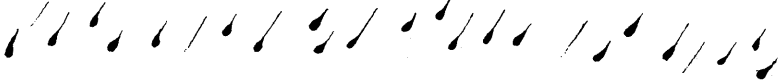
(眼科医・在カメルーン)



自閉症の子どもに 特別な保育はあるか

津守 真

一九七〇年頃の母親懇談会で「自閉症」には特別な治療教育が必要かが真剣な話題になったことを、前々号の本誌に記した。その後私は障碍をもつ子どもの保育に多くかかわってきたが、自閉症に特別な保育があるとはどうしても考えられない。どの子どもにも共通のこまやかな保育があるだけである。現在もなお同じ質問にぶつかるので、ひとりの子どもの保育の過程について記そうと思う。



—その子は手のひらを目の上にかざしてひらひらさせた。当時、これは「手かざし行動」と名付けられて、自閉症の特徴と考えられていた。子どもはその世界に閉じこもるから、やめさせなければいけないという考えが一般であった。私はこの子は本当は何を見ているのだろうかと思ひ、その子に近寄って同じように目の上で手をひらひらさせてみた。太陽の光が木の葉の間から、指のすきまから射して、その美しさに驚いた。この子は美に対して特別にセンシティブなのではないか。私がそう思っただけで見たらとたんに、その四歳の子が私を見て、にこっと笑った。そこからその子とのつき合いが始まった。

次のとき、その子は砂に37、38、……と数字を書いていた。これも自閉症の特徴と言われる行動である。私はそばに座って一緒になつて数字を書いていると、ときどき私を見た。急に砂を指先にひとつまみつかんで、私の頭の上へのせ、「ポーシ」と言った。私は意外な展開に驚きながら、顔をおおげさに振つて砂を落とすとケラケラ笑つた。動きは更に大きくなり、頭だけではなく砂を背中にもかけた。私が後ろを向いて「ヤッター」と言うときケラケラ笑い、ふざけ合つた。その朝はこういうことを何回も何回もやつた。この子は自分の世界に閉じこもっているところではない。私との相互のやりとりを楽しんでいる。




滑り台に行ったので、私もついてゆくと、階段の途中で待っていて私を見てニコと笑う。そうしているとき急に姿勢をかえて、タイヤを回しはじめた。この子は気持ち切り替えるのがぎこちない。物を手に持つことも、手から放すことも不器用である。私は、水と泥の遊びによって、この子の自然性を回復しようと考えた。物質と直接ふれる遊びを幼児は好むが、子どもによっては観念が先行して、じかに物に触れることが不得意である。そういう場合には、保育的工夫が必要になる。

四月十七日（一九七六年）

砂場で水を流し、シャベルで砂をいじっている。母はこんなに砂遊びをするのははじめでだと言う。私が水に湿った砂を手渡すとちよつとさわつて落とす。砂が手につくと洋服でふく。それを繰り返していた。そのうちに砂を少し手に握つて投げた。そのうちに小さな石をフェンスの外に投げた。投げたと記したが、手から放したと言つた方がよい。

四月二十四日

登園するとすぐに砂場に入る。母はこの子はこの頃水に憑かれたみたいだと言う。水と砂がぐしゃぐしゃになったところに手をいれ、握つたり放したりしてかきまわす。私も手を入れて同じようにしてみると、何かもやもやした気持ちに出口がでることが分かる。こうして物質の感覚に注意を向けながら付き合っていると、砂遊びが



長く感じられない。

五月一日

水道を強く出して圧力をたのしみ、原始的な水の遊びをしていた。雨上がりの水たまりの中にはだしではいいり、とても楽しそうだった。この子にとつての水はこれまで禁止されてきた領域であり、その境界をはみ出す水である。今日は水の中に自分の足を入れた。この子とはときどき手かざしをして太陽の光線を楽しんでいるが、それよりも、砂と水に直接にふれて遊ぶことの方がもつと面白くなった。

七月三日

水に砂を入れる。バケツを庭の真ん中にもつて来て水の中に土をつかんでいれる。それからコップで水をくみ出して土の上にかけて。数十回繰り返し返した。濡れていないところにバケツをおく。つまり自分は水に濡れないところに立って、手だけで水をいじるのである。雨が降って来てもつづける。

十月十六日

トランプポリンでとぶとき、私が1、2、3とかけ声をかけると、3で高くとぶ。降りたところできすぐるとケラケラ笑って喜ぶ。何十回も繰り返し返す。飛んでいるとき目をつぶっている。目を閉じて飛ぶときは理性の外に出て自由になっているみたいである。毎日、長時間これをやった。



四月十一日（一九七七年）

いつも入れる部屋に鍵がかかっていた（幼児のグループと養護学校とが合併した第一日）。この子はこれまでと違う部屋に入ろうとしなかった。私は砂をもつて傍にいった。弟と砂をこぼして（手に握って放して床に落として）遊んだ。それから私に砂をかけてケラケラ笑った。手放すことが他人との間の遊びになっている。ふだんと違う環境で、はじめ私に警戒していたが、砂をかけて遊ぶことによって関係は回復された。

四月十九日

庭で、私が水を汲んで来ると水をざーとあけた（水を容器から手放すのと同じイメージ）。それからたらいに水を入れ、水の中に入って遊んだ。他の子どもたちが砂場の水たまりにいて中で調和して遊んだ。私は一生懸命水を運んで、長続きするようにその場を保った。ゆっくり遊ぶことと、自由空間のひろがりができるようにと私は考えてそこにいた。手だけではなく、水たまりに足を入れ、両手でかきまぜ、泥を寄せ、掴み、ぐにやぐにやにしたりしている。それをずっとやる。

ホースから庭の真ん中に水をとばす。空の美しさが印象的だった。

家に帰り、父に幼稚園にいったと自分から話し、明日も幼稚園に行くと言う。

五月十二日

やかんに水をいれ、やかんの口から水を出すのを繰り返した。やかんは人間の身体に類似している。「デタノ ウンウンデタ」と言う。このときにはこの子の便秘のことを私は知らなかったが、排泄に関心があることは察せられた。弟が水道の口にホースをさしこむと、じきにこの子がホースをとり、やかに水をいれてこぼす。やかんが重要である。このように他の子どもとの間にコンフリクトも生ずるが、それくらいこの水の遊びが面白いのである。

水たまりにプラスチックの葡萄が落ちているのを見つけ、容器にいれ、「銀の葡萄」と言う。葡萄が落ちるとすぐに拾い、水に入れる。ほんとにきれいな球である。この球は彼にとつて大切なものであるらしい。

五月二十三日

オランダのフェルメール先生が来訪された。この子の砂遊びを見ていて、「砂をいじる身体感覚がもとになって、イマジネーションの世界がその中から開ける(enfaltenする)」ことを熱く語られた。この子を見ていると、物質のイメージがふくらむにつれて生活しやすくなることがよく分かる。

この子と私の日常はまだつづく。

コミュニケーション能力を考える(2)

「きく」ことからはじまる

村松 賢一

「伝える」から「応じる」へ

コミュニケーションは「話すこと」と「聞くこと」とから成り立っている。これには誰も異論はないと思う。では、二つの行為のうち、どちらが先なのかとなるとどうだろう。会話はことばのキャッチボールなど

というが、それでいくと、「投げる」(話す)ことから始まるような気がする。なぜのつけからこんなことを言うかという、この点をどう考えるかが、コミュニケーション能力の発揮に大きく関わってくるような気がするからである。

認知心理学者の佐伯胖さんの考えはこうだ。佐伯さ

んは、『話す』ということ、『伝える』こととしてではなく、『応じる』こと、応答することとみなすことが大切だと言う。

まず相手がいる。そこからすべての「話し」がはじまる。相手、すなわち、「あなた」その人が、何を考え、何をのぞんでいるかを知ろうとする。そこから、「話しはじめ」が自然に出てくる。これをいおう、あれをいおうと思つて授業に臨む教師も、子どもたちにも面したら、まず子どもたちひとりひとりを「あなた」として、「きみ」として、ながめなければならぬ。「今日の○○君はどうかな?」「△△さんは何を考えているのかな?」と思つて、相手に心をくばっていると、自然にことばが出てくる。それが「話し」である。(『わかり方の根源』、小学館)

コミュニケーションは、相手の心の中のことばに耳を傾けるところから始まるというのである。そういへ

ば思い出すことがある。アナウンサー時代、プロ野球巨人軍の江川投手にインタビュしたときのことだ。名うての話し上手といわれた江川さんに、その秘訣をたずねると彼は即座にこう言ったのである。「人の話しをしつかり聞いていることですな」。たとえば結婚式で祝辞を頼まれたとする。誰が何を言ったか、どのような流れで自分のところに来るか、それをよく見極めて、いくつか用意した中から最適な話を選ぶのだという。さすがに打者の心理を読みなれた人のことばだなど感心した。何を言うかは話し手の領分に属し自由のように思われがちだが、実は、聞き手や置かれた状



況との関係を抜きにしては考えられないのである。

もう一つ、夕鶴の山本安英さんのことばも忘れがたい。山本さんは、「なんといいっても舞台では、相手のことばをちゃんとよくきくということがいちばん大事で、これがきけませんと、自分のせりふが空虚になります」といつている。そして、なにか舞台上に集中できずに「しらじらとしてしまったとき、相手のせりふを真実に聴こうとする。できるだけ自分のからだを楽にして、集中して、相手のせりふをよくきく」ようにするそうだ（『きくとよむ』未来社）。故黒沢明監督も、生前、同じようなことを言っていた。「たいていの俳優さんは相手のせりふを聞いていない。自分のせりふだけ気にしている。だから、リアクションがない。話は進行してるわけでしょ。相手が何を話すかわからなはずなのに、待ちかまえている」（朝日新聞、一九九四、四、一三）。

要するに、皆一つのことをいつているのである。コミュニケーションは聞くことからはじまると。ロシア

の哲学者バフチンによれば、話すことだけでなく、書いたことばも、文学作品でさえ、彼以前に語られたことばに対する「返答」だという。このように、表現の本質をリアクションとしてとらえてみると、不思議に、話そう、話そう、書こう、書こうという力みや執が薄れ、話しはじめ、書きはじめがすつと出てくるような気がする。授業がぎくしゃくしてうまくいかないときなどを反省してみると、どうも「応える」話し方ではなく「伝える」物言いになってしまっていることが多い。二つの姿勢は似ているようだが大きく異なる。

聞くから聴くへ

応じる話し方の前提は、相手の話をよく聞くことだといったが、そのためには、テープレコーダーで録音するようにならただ聞こえてくるままを受け入れる「hear」ではなく、ことばにならないことば、ことばの奥にある意図を聴く「listen」が大切である。よく

聴ける人はよく話せる。よい例があのだモリである。

スタジオに招いたゲストとの軽妙なおしゃべりには昔から感服していたが、あらためてその会話を分析してみると、彼が相手の話を実によく聴いていることがわかる。左に、一例を示そう。女優の安田成美さんとの会話である。最近久しぶりに自動車の運転を再開したという安田さんに、その理由からたずねる。

タモリ 最近、また何で運転をしようと思ったの。

安田 行動範囲が広がるかなと思って。でもね、結局一緒なんですよ。この店に一人で買い物に行きたいと思つて目標立てて行くんだけど、車がいつぱい並んでいると、縦列駐車できないから、こう、間に入れないんですよ、私ね。

タモリ 縦列駐車できないってことね。①

安田 だから、そのまま行っちゃうんですよ。で、空くのを待つてグルグルグルグルまわつて、

そのうち諦めて帰つちやつたりとか。

タモリ 帰つちやうの。②

安田 面倒くさくなつちやつて。

タモリ そんなに縦列駐車だめ？③

安田 だめです。

タモリ 確かに、縦列駐車いやなもんだよね。④

安田 後ろだと、何が何だか分からなくなつちやうんですよ。

タモリ うん？

安田 お尻から入りたいって時ありますよね。

タモリ うん。縦列駐車つて大概そうじゃないと東京だと止められないもんな。⑤

安田 そう。でも右か左かどつちだかわかんなくなつちやうですよ。

タモリ えっ？ 右か左かつていうのは？⑥

安田 自分で……。

タモリ どつちが右だかわかんなくなつちやう。⑦

安田 そう、わかんなくなつちやう。パニック

ちゃって。

タモリ こうやって、振り返ったときに、もうどっちが右だかわかんないの？⑧

安田 振り返ったこっちが右かなと思つて。でも、こっちを向くとこっちが右だから。

タモリ そういう次元の…、あれは相対的な左右じゃないんだから。

安田 でも、本当にそうなんです。

タモリ それ、珍しいよ。こうやったらこっちが右でつていうのは。

安田 免許取立ての人がいて、私が下りて、右、左つていつてあげたんですよね。誘導してたら、ぶつかっちゃったんですよ。何でいうとおりにしないのつて言ったら、「言つてた通りにしたわよ」つて。全部逆さに言つてたらしい。

タモリ なんて、逆さに言つてたのかな。⑨
安田 なんてでしょうね。そのときは…。



タモリ そのときはだから、自分がこういう感じで言つてたんじゃないの。後ろ向いた気持ちで右、左つて言つてたんじゃないの。

安田 ただの馬鹿ですね。(笑い)
(フジテレビ「笑つていいとも」テレホンショッキング」より)

右の会話からタモリの発言だけ拾っていくとある事実に気づく。彼は自分から新しい話題を提供してないのである。すべてが、相手のことばの繰り返し①

②、共感の表明(③④⑤)、詳しい説明もとめ(⑥)、話の継ぎ(⑦)、補足(⑧)、理由たずね(⑨⑩)など、相手の話を受けたリアクションなのである。これは、よほどしっかり聴いていないとできない芸当である。世間はタモリを話術の達人と呼ぶが、秘訣の一端はその聞き上手にあつたのである。

それにしても、一言で聴くというが、頭の中では、検索、照合、推論、解釈など実に活発な自己内対話が行われているものだ。聴くことは決して受動的な行為ではないのである。

聴くから訊くへ

先ほどのタモリの会話を見ると、相手のことはを聴くきき方には、もう一つ、訊く、英語でいえばaskというカテゴリがあることがわかる。この、よく分からないこと、もう少し詳しくききたいことをたずねるという行為も大きくみれば「聴く」の範疇に入るのではないだろうか。

最近、相手の言いたいことを上手に聞き出してやることが円滑なコミュニケーションにとつていかに大切か感じさせられる場面に出くわした。

ある職場の印刷機の前。さつきから、OL経験の浅いY子さんがおろおろした様子でミスコピーを重ねている。そこへ、先輩のT子さんが通りかかった。どうもY子さんの仕事が順調に行っていないと見たT子さんは、「何やってるの?」と訊くと相手を責めているように受け取られるかもしれないと考え、「何か困ったことでも?」と声をかけた。以下はそれに続く会話である。

- Y1 (泣きそうな声で) うまくいかないんですよ。
T2 そもそも何をやっているのよ。
Y3 これ! (失敗したコピーを見せる)
T4 これでどうしていけないの。
Y5 裏に黒いのがついてしまうんです。
T6 裏の汚れは問題ないんじゃないの。

Y 7 すけて黒くなるからだめなんです。

Y子さんはパニックに陥ってしまったのだろう。事情を知らないT子さんに一から説明することができず、いきなり部分から話しはじめたり（Y1）、ことばで言うべきところを実物を突きつけたりで（Y3）、何がどうなっているのか、全体像がさっぱりわからない。T子さんは、つとめて冷静に、からまった糸をほぐすように問いを重ねる。

T 8 どうしたいわけ。

Y 9 これを（原紙を見せて）A4サイズに印刷したいんです。

T 10 今までの中でいちばんうまくいったのはどれ。

Y 11 これです。でも一回ならいいんだけど、続けるとだめになっちゃうんです。（以下、独り言）
B 4 だただいじょうぶなのになあ。

T 12 じゃB4でやればいいじゃない。

Y 13 それだと紙が無駄になっちゃう。刷り上がった

後、カッターでまわりを切りとらなくちゃいけないから手間もかかるし。

T 14 でも、いつまでもできないんじゃないかたないわね。ジタイは解法に向かっているの、それとも
停滞してるの。

Y 15 カイケツに向かつてません。

T 16 誰に頼まれてるの。いつまでに。

Y 17 課長です。三十分ぐらいでって。

このあと、T子さんはY子さんを連れて課長のところに行った。課長はY子さんに、もしA4でうまくいくようならA4でという程度で、何が何でもA4でなければだめと言ったわけではなかった。が、新人の上、人一倍まじめなY子さんは、そうはとらなかつたのである。以上は、脇でたまたまやりとりを聞いている筆者が、あとで本人たちに確かめた結果わかったことである。

このケースでとくに感心させられるのは、T子さんが、終始相手の気持ちになってことばを選び、何から訊くべきかをよく考えていることだ。T子さんの筋道立った問いかけに答えるうちに、Y子さんもだんだん落ち着きを取り戻しわかりやすく話せるようになった。筆者の経験でも、Y子さんのように、仕事を一人で抱え込んで他人に相談したがらず、自分で悩みを深めてしまうタイプは決して珍しくはない。このささいな事例は、そんなとき、そばにT子さんのような聞き手がいることがいかに大切か教えているように思う。

鐘は突き手次第

インタビュ어의心得としてよく先輩から、鐘は突き手次第だと教えられたものだ。解説するまでもないと思うが、未熟なアナウンサーほど、「いやー、無口な人で困った」と相手の責任にするものである。無口なのではない。この人には話しても無駄だと思っから話さないだけなのである。どうしたら朗々と鐘を鳴ら

すことができるか。ずいぶん試行錯誤を重ねたが、たどり着いた結論は、「訊くな、思い出させろ」であった。人間は質問すれば答えるというものではない。話させよう、話させようとする、かえって殻を閉ざしてしまうものである。そうではなく、「聴いて」、「訊いて」、経験やできごとを思い出させるようにすると、不思議なことにはほとんどの人が、自分の方から話しはじめるのである。

現在、コミュニケーション能力の育成が大きな教育課題になっており、人前できちんと主張できる子どもが目指されているようだが、話すことは大きくことから始まることをしつかり教え、口が達者なばかりで他人の話のきけない子を作らないよう十分気をつけたいものである。

(お茶の水女子大学)

幼児の攻撃性

友定 啓子

はじめに

前回の自分の文章を読んで、暗くなってしまった。こんな風に幼児を見なければいけないことにである。

今まで、幼児について書く機会は何度もあった。し

かしそれは、たいてい幼児の持つ明るさやけなげさの自分なりの発見であつて、複雑ではあるが、基本的には成長への動因をたくさん持っている存在として私は幼児を見ていた。そういうある程度安定している幼児たちへの対応は、大人はあまりこだわらずに自然体でのぞめばいい、生活リズムを整え、あれこれ押しつけ

ないで、その意欲を育てていけばだいじょうぶと、楽天的であった。大人の教え込みによるゆがみを起こさないように、自戒していればいいのだと思つてきた。

たぶんそのことは基本的には変わらないのであろうけれども、最近、それだけでは、目の前の子ども達を理解しきれないと思うことが増えてきた。子どもの持つ負の部分をきちんととらえていないと、援助できないことがあると思うようになってきた。子どもの持つマイナスの姿をきちんととらえ、その中にプラスの芽を見る視力が保育者に必要とされると思うのである。

遊び感覚の攻撃

ところで前回、私はもう少しで、勇み足をするところだった。幸運なことに、原稿の下書きを保育者と討論する機会が得られて、それは避けられた。何かというと、攻撃的な行動で大人に向かつてくる子ども達も、基本的に不安定で、充実した生活をしていない子どもだと断定していたのだった。

保育者から異議が出た。多くはそうかもしれないが、必ずしも全部そうとは限らないと。実はその時、ある男子学生が子ども達から集団で攻撃をしかけられていた。そういわれれば、その子どもたちはどちらかといえば、よく遊べていて、友達も多く、ある子はリーダーでさえあつた。一緒に遊んだこともあるが、どんどん遊びのイメージを出す子であつた。この子といえば遊びが進むというタイプの子だった。

そんな子がどうするかというと、「仮面ライダーをやっつけに行こう！」と友達を誘い、集団でその学生をやっつけに行くのであつた。要するに遊び感覚なのである。その学生は体も大きく、幼児に少々やられたつてどうってことはない、子どもに対応していた。少々手ひどいことをされても、痛いとか、やめなさいと言ふことは考えになかつたらしい。それが、子ども達の遠慮のない行動につながつた。悪気はないよすが、やるのがエスカレートしていった。友達に指示を出し、抵抗しないその学生に襲いかかるので

あった。

自分の思いを出さない学生

私は私で、その学生が理解できないでいた。ずっと前から、そんなことをされたときには、ちゃんとやめるように言わなければならぬと言っているのに、いつこうにそれを受け入れる気配がないのであった。

子ども達の行動はエスカレートし、私は保育参加を中止させた。そういう行動を子どもにさせること自体が問題なのだと言っても、わからないようだった。別に意志の弱い学生とは思えず、誰よりも熱心に幼稚園に行き、他の場面ではむしろ逆にしっかりしているように見えていただけに、私には意外で納得がいかなかった。

この学生は、解決は簡単だと言った。自分が強い立場になって、子どもに向かえばいいのだと。しかし絶対それだけはしたくないと、固く決意していた。子どもにはいけないことだとわかってほしい、でも口が避

けても自分からは言わないと決めていたようだった。自分の思いを口にし、やめるように強い立場でいうことによって、子どもとの関係が切れるとおそれているのだった。何よりもそれだけは避けたいことらしかった。

子どもと対等になるということ

ほんとうに子どもと人間として対等になるということを、わかっていないと私には思えた。子どもに注意することは、上位に立って物事をすすめることだと思つて、それはできないのだった。対等な人間関係ならば、自分の気持ちを伝えられるということが納得できないようだった。上か下かしかないのであった。子どもに対して上からものを言つては、関係が切れると思つているらしかった。ふだんの人間関係にそういう見方をしているのかもしれない。そういえば、ここ最近、子どものことを話すのでさえ、討論が進まないと思ふことがあった。学生達は、人に意見を言うときに

は正しいことをいわなければならぬと思っ
ていた。わからないから人に質問をして、はつき
りした答えが得られなくても、それで引っ込んでしま
う。自分はこう思うけれども、あなたはどうかと
いう問いかけはとんとなくなつた。要するに相手と対
峙しないのである。

子どもにきちんと注意しないのに、子どもにはわ
かつてほしいと切に望んでいる。いつかわかつてくれ
るとも思っているようであつた。対決しないで相手か
ら変わってくれることを望むなんて、そんな関係を守つ
てなんになると私は思うけれども、それが精一杯だつ
たようだ。彼が最後にやつと行き着いた結論は、自分
は人間としての素直な気持ちを言う前に、強い理想論
にしばられていたということだつた。



大人の対応と子どもの行動

そうはいっても、子どもの方だつて問題ではないか
と思う部分もあつた。抵抗しない学生にみんなで襲
いかかつていくなんて、どう考えてもおかしいと思
えるのである。

実は、これとよく似た学生が前にもいたのだつた。
彼は、実習の間中、子ども達に使い走りややらされ
た。二人に共通していることは、子どもにことばが届
かないことであつた。いやなことをいやだと言わ
ない、子どもにやめなさいと注意をしても、そこに意志
が込められていないので、ことばがうわついで、子ど
もに届かない。そして使い走りを命じていたのは、や
はり有能な、ほんとはよく遊べる、さしたる問題のな
い子たちであつた。

子ども達の行動にも問題を感じるけれど、それに対する大人がこうでは、子どもは自分のしていることが許されると認識し

てしまう。よくも悪くも、子ども達は大人のふるまいから何が許され、何がそうでないのかを学んでいく。

ある女子学生は、体調を崩したなどといって授業にこなくなつた。記録を読み返し、よくよく聞いてみると、子どもと接するのが苦痛だという。色んなことを頼まれて、いっさい断れないのだった。私は驚いて、「どうして？」と聞くと、「子どもを絶対に怒らせてはいけなと思つて」と言うのである。そのためビクビクしているようだった。子どもの要求は際限がないので、それにどう対していいのかわからず、結局、自分は子どもに嫌われていると思つていたので。自分の気持ちをちゃんととってもいいのだといったら、驚いたような顔をしていた。

敗者型の親と子ども

人はいつ親になることを学習するのだろうか。大学で心理学や教育学を学んでいてこの状況である。その昔、親になることは自然体でこなしていけるはずのこ

とであつた。誰にもできる、本能的で、自然発生的な行動と思われていた。しかし実は、それは本能でもなんでもなく、観察という社会的学習で支えられていたことが明らかになつた。その社会的学習が失われた今、「自然体」で臨むととんでもないことが起こる。

生活行動が世代間で断絶され、各世代をターゲットにする文化に振り回され、異文化と交わることを避けてしまつている社会の中で、お互いの関わりをどこでどう学習していけばいいのだろうか。

もし親が、子どもの機嫌を損ねることをおそれて接していたら、もし親が、子どもにきちんとしたことはで善悪を教えることに抵抗を感じていたら、子どもを尊重するということを間違つてとらえていたとしたら、もし親が、子どもによつていやな思いをしていても、それを子どもだからと我慢していたら、子どもは親から何も学ばなくなつてしまう。「親業」でいう「敗者型」で、自分の率直な思いを子どもに言えない親たちである。そういう親の場合、子どもは自分の判

断、自分の感情が一番大事なのだ、人はそれに従うのが当たり前だと学習してしまう。自分をコントロールしたり、相手の気持ちに気つくチャンスがなくなってしまう。

それは子どもにとって、生涯にわたる大きなハンディを残す。子どもは相手を自分の都合のよいように動かすことだけが最大の関心事になる。相手の思いに気付かない。相手と対等につき合えなくなってしまう。自分に対等に向かってくる相手に否定的な感情を抱いてしまう。子ども社会では、そういう相手がふつうだから、感情的に満たされない子どもになってしまう。自分が強く出ることしか知らない。ますます人は離れていき、さらに相手を強く支配していく方法をとるか、支配できる弱い相手を選び、強い自分という虚像にしがみつくことになる。あるいは、自信を失ってあきらめるかのどちらかになっていくようになっていくだろう。

強い自分でありたいという願い

弱い子ども・不安定な子どもが自分を守るために行う攻撃行動の他に、なんでもない子どもあるいはむしろ有能な子どもがこうした相手の優しさや弱さを利用した形で行う攻撃が、きっかけがあれば、すぐに出現するというのが、もう一つの大きな問題だと思う。

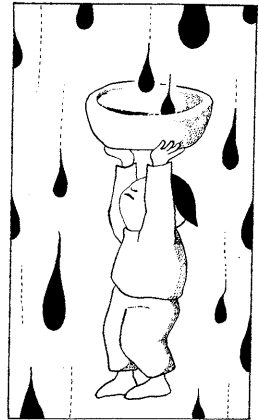
もちろん、こういう攻撃については、対等に向かつていけば、この問題は回避である。わからない子どもではないからだ。しかし、大人側の間違った対応が続けば、自己肥大の感覚を生み、弱肉強食の論理を学習させることになるだろう。

子どもが「強い・よい自分」でいたいと望むことはわかる。それは、自分が様々なことができるようになったり、我慢できるようになったり、よりよい自分に結びつく形で行われるべきだと思う。自分より弱いものを攻撃して勝って、「自分は強い」と虚像を得たところでなんの力にもならない。そんな子ども達が増

えている。なんでも自分が一番でないと不機嫌になつてしまう子どももいる。自己の内容を充実することではなく、他者を陥れることを考えるようになってはおしまいだ。それで必死に大人に認めてもらうことを願っている。きょうだいによく起こる現象だ。親が優劣でしかものを見ないとそうなる。

大人への警戒心

わたしも学生時代、実習に行っていた。しかしこななりにやりたい放題をする子どもはいなかった。遠慮のない子は確かにいたけれど、子ども達の中に大人に対する敬意のようなものもあつたし、それなりの期待を持つて接してきたくれたと思う。何よりも基本的には好意や親しみを寄せてきてくれた。それが今は、警戒心や不信感、さもなくば利用できるかどうかと見定めるように大人に向かつてくる子どもが増えた。これも、それまでの大人との人間関係で身につけたふるまい方だと思う。それは大人への不信感のひとつの形と



いえる。現代の子ども達はいへんな重荷をかかえていると思えてくる。

緊張感の中に暮らす子ども達

子ども達は昔と違って、非常な緊張感の中に暮らしている。並みの子どもでは、親は満足しないのである。いつも、自分が人よりよい子強い子でないと、親が不機嫌になるのである。幼児期から、たくさんのおけいごことに行つて、その場その場で、優劣を付けられている。その優劣に親たちが振り回されている。ずいぶん昔の話だけれど、よそのお宅に親子で遊び

にいったとき、子ども達はピアノを弾いて遊びだした。一人の子がどうやらグレードの高い曲を弾いていた。「まあ、〇〇ちゃんはどうこんな曲を弾いているの」と、その家の母の顔色が変わったことを覚えていた。そんなどうでもいいことで、幼児の品定めをし、自分の子どもをせき立てている。

子どもはかわいがられているという気がしないと思う。子どもは、よくわからないけれど、親が自分を不満に思っているらしいと感じる。子どもは自分に自信を持ってない。安心してものごとにとりかかれない。どんな評価がでるかに神経を使う。その時の親の感情をどうかわしていくかということに気を使っている。そのうつぶんをどこかで晴らしたいと思うのも無理はないと思う。

親の前ではとってもいい子だけど、幼稚園では攻撃的だったり、陰湿だったりという子がいる。学生のように、気を使わないでもいい相手には、本音がでてしまう。学生でなく、反撃しない弱い子に向けることも

ある。

私は「早期教育」には、心底反対である。少々の技能は身に付くかもしれないが、失うものがあるに多すぎる。そのもつとも大きなものは、親子の自然な愛着関係に水を差すということだ。親が不機嫌になってまでやらねばならぬことは、幼児期においては無い。

このご時世で、幼児期のおけいごことに背を向けるのは容易ではない。しかし、できないことはない。どうしてもやりたいのなら、決して競争させないことである。基本的なおけいごとは子ども本人の責任で通えるようになってからでよい。

幼児の攻撃性は、大人からの抑圧によって起こると私は考える。男児であれば鼓舞されることさえある。それは自己価値観に関わっていて、感情としてため込まれ、別の場所で発散される。攻撃性の自己コントロールは、幼児期に出会う重要な課題のひとつである。

(山口大学)

子育ての探究 その二

飛鳥・奈良時代の古典に描かれた親子像

柴崎 正行

三人の先生

私は群馬高専時代に三人の先生方から大事なことを学んだ気がする。

化学の薊^{あじみ}先生の最初の授業では一本のローソクを渡されて、それについて観察して気づいたことをすべて記述して考察しなさいという課題を出された。私は生まれ

て初めてローソクというものを、さまざまな視点から観察してみた。触った感じ、匂い、そしてローソクに火をつけて燃えているときの炎の様子や、煙の出方、匂いや熱さなど、考え得る限りの視点から探究をし、自分の気が付いたことを可能な限り記述してみた。

それによって、それまでは単なる火をともし古びた道具としか見えなかったローソクも、じっくり観察してい

くと多くのことが発見できることに驚いたし、また発見することによりローソクの持つ透明感の意味や炎のもつ美しさと燃えるということの本質にも追っていきけるということを知った。そして当たり前と思っている事象も、新たな視点からじつくりと観察をしていけば、それまで知らなかったり見えてこなかった本質に迫ることができるところを体験した。常識にとらわれないで物事を見ていく態度を持ち続けることこそが、本当の科学的な姿勢なのだということを蘊先生から学んだように思う。

日本史の藤木先生の授業も、楽しみな授業であった。それまで中学で学んだ制度史の裏側には、それぞれの人物の生きざまがあり、多くの農民や下等武士の生活があり、その人生や生活こそが日本の歴史をつくりあげてきたのだということを、何度も話してくれた。藤木先生の授業では、それぞれの時代に、なぜ制度や体制が変わったのかを、著名な人物の人間関係や社会問題をからめて説明していただき、その変化のために当時の社会や生活に生じた不安や楽しみとからめて文化や宗教などについて

ても説明してくれた。歴史とはこういう仕組みで成り立っていたのかと、自分の歴史観が全く変わったことを覚えていた。それ以来歴史が大好きになり、特に歴史的な人物を描いた歴史小説が愛読書のひとつになった。

三人目の先生は、倫理学と古文の笠井先生である。この先生の授業は、男女の恋愛論が中心であった。特に日本の古代からの短歌や物語に描かれた男女の愛の表現とその時代背景などについて、詳しく語ってくれた。それまでは名前を記憶する対象でしかなかった古事記や万葉集、そして源氏物語などの中に、当時の人々の男女や親子の愛情や悲しみがたくさん描かれていることを教えられた。つまらなかつた古典が、それ以来大好きな科目のひとつとなったことを思い出す。源氏物語などの現代語訳を読むようになったのもこの頃であった。笠井先生は数年前に亡くなられたが、古典を好きにしてくださったことを感謝している。

高専を卒業後は子どもの臨床に関心を抱き、そこから保育学の必要性を悟り、その背後にある育児の歴史観を

明らかにすることをおの連載での課題にしている私にとって、ここに至る過程は自分の人生においてそれなりに必然性があつたのだと実感できる。日本の親子関係と育児を書くに当たって、先生方への感謝も込めてそのことを書きとめておきたかつたのである。

『万葉集』に描かれた母子の関係

私は古文書の専門家でも、歴史の専門家でもない。そこで、その分野の専門書を引用しながら、親の愛情について考察を進めていきたい。

三浦佑之はその著書『万葉びとの「家族」誌―律令国家成立の衝撃―』において、『万葉集』には親子関係を題材にした歌が数多く残されていることを明らかにしている。父・母という語を読み込んだ歌だけでも八十首あり、そのうちの大多数は作者未詳か防人歌で占められており、しかも息子が親を歌っているのは防人歌に限られそのほとんどが「母親」に向いているのである。

防人歌とは東国から九州の防衛へと旅立つ二十代から

三十代にかけての兵士の歌であるから、東国における親子関係において、息子の母親への思慕が強かったことを意味しているという。しかもその歌の内容は、母親を花や玉になぞらえており、身につけて旅をしたいと歌っているのである。この内容の意味について、当時は母親が神のような霊力をもつ守護者・援助者と考えられていたと三浦は解釈している。母は息子の無事を祈る者であり、息子は母への慕る思いを抱き続けていることがわかる。受験に向かう息子の合格を祈る現在の母親の姿とも重なってくるものがあるといえよう。

では母親と娘の関係はどうだったのであるうか。三浦によれば、万葉集には母と娘の関係も数多く歌われているのである。しかもその歌の内容を検討すると、年頃の娘をもった母親がその行動を監視し、娘はそれと対立して恋心を抱くという構図が描けるのである。おそらくは当時は主に母親の家に親子で住んでいたもので、恋におちたときには男性が娘を訪問したのであろう。それを母親が監視して、許したり拒否したりしていたのかも知

れない。その母親の監視を盗んで恋人と逢っている娘の姿は、女友達と一緒に偽って恋人と逢っている現在の女子学生の姿とも重なってくる。

防人という兵役に着くことにより、息子たちは母親への思いを募らせ、一方恋を通して娘たちは母親から離れ自立していくというのが、当時の母子関係の姿だったようである。

『風土記』や『古事記』に描かれた父子の関係

『万葉集』には父親のことがほとんど出てこないが、『出雲風土記』や『古事記』、そして『日本書紀』などに描かれた伝承や説話には父と息子、父と娘の関係を描いた話がたくさんでてくることを三浦は示している。

娘を殺したワニに復讐をする話（『出雲風土記』）や、娘の結婚は父親の許しを得てから可能になること（『古事記』）などが、よく描かれているという。その背景には、父親は娘や息子を守る存在であったこと、それは家族に生じた危機は父親によって守られ、もしそこに歪み

が生じた場合には父親によって修復されるという父親観が存在していたことがわかるという。

また父親は家を代表して娘の結婚の許諾権を有しており、娘を与えるとともにその夫になる男性には「百取の机代の物」という、今でいう花嫁道具のようなものを贈ったという。しかし『風土記』や『古事記』、『日本書紀』などの話は、あくまでも天皇や豪族である場合が多いので、これを必ずしも当時の民衆一般の父と娘の関係とすることはできないであろう。

これに対して、父親は息子に対しては成長させる存在であり、息子は父親の援助により一人前になっていく存在として描かれているという。例えば、物言わぬ息子を何とかして発語させようと腐心したり（『出雲風土記』）、物言わぬ息子を小舟に乗せて揺らすことにより発語させようと苦心したり（『古事記』）、成長し



た息子に自分の地位や財産を譲ることによって跡継ぎにする（『日本書紀』）という話などがよくある。

こうした話の背景には、古代から飛鳥時代にかけて描かれた神話や伝承には、父親はわが子を成長させるといふ父子原理が強く現れているといえるという。その父子原理はいつも安定したものとは限らず、成長した息子が父親を凌ぐ競争相手にもなり、そこには父と息子の対立も生じたようである。『古事記』や『日本書紀』には、こうした対立を描いた話がたくさんあるという。

いまも父親と息子が対立することはよくあるし、そうした対立を乗り越えてこそ、息子は自立した存在になっていくのである。

律令国家成立と親子関係の変化

以上見てきたように、『古事記』『万葉集』などに描かれている母親は、子を産み育てる存在であり、子どもを棄てる母親などはあり得ないという描き方がなされていた。また父親も娘や息子を守る存在として認識されていた。

た。

しかし七〇一年に大宝律令が施行され、個人に課税する班田収授法という新たな税制度が確立すると、その律令体制を管理する機構として平城京が造営された。この都市の成立と市場経済の発展により、人々の生活は大きく変貌し、それに伴って親子関係も大きく変化していったという。

私も平城京の跡に立つたことがあるが、広大な敷地と整備された都市であったことを示す遺跡を前にして、その規模の大きさに圧倒されたことを覚えている。当時の日本の人口は五〇〇万人前後であつたらしいが、平城京は人口が一〇万人ほどであり、天皇から貴族、僧尼、中下級官吏、商人や職人そして奴婢に至るまで、あらゆる階層の人々が生活していた。

平城京の東西には市が設けられ、ほとんどの人々は生産せずに消費をしていたという。日本で最初の消費型の大都市が出現したわけである。そしてここで生活する人々は、律令制度とともに中国から日本にもたらされた

儒教思想を身につけていく人々であり、学問と才能によつて財産を蓄えていく日本初の都市型中産階級を形成していく人々でもあった。

その都市型中産階級の中心は「宮人」という新たな階層である。現在でいえば国家公務員という職業であろうか。この階層は、貴族など一部の人々を除けば、それまでにはなかった消費だけをする人々でもあった。この消費中心の生活が、それまでの親子関係を著しく変えていくことになったのである。

『日本霊異記』に描かれた母子の関係

『日本霊異記』は正式には『日本国現報善悪霊異記』という書名で、全部で一話からなる説話集であり、大半は八世紀に描かれたとされている。三浦（一九九六）によれば、この『日本霊異記』は平城京という都市が成立し、貨幣の流通により商品経済が行き渡るようになり、人々の意識や生活が大きく変わりつつあった八世紀の世相を映した唯一の説話集であるという。

この説話には、約三〇例の親子関係が描かれているが、そのほとんどは親と子のいわゆる「核家族」が中心であるという。そしてそれまでの古典では描かれなかった、自分の子どもを棄てて養育しない母親が登場してくるのである。

若いころ幼い我が子を棄てて男と遊び、何日も乳を与えなかつた罪のために、乳房が大きく腫れてしまった女がいたが子どもたちはそうした悪い母を許したと称賛される話がある。ここには、子を産み育てることこそが「善い母親」であり、それを放棄するのは「悪い母親」であるという儒教的な「慈悲」像が象徴的に描かれているといえよう。

また性格が貞淑で夫によく仕えている女が、七人の子を産んだが、家はきれいに掃除し、子どもたちと一緒に笑顔を忘れず、感謝の心を忘れずに食べることを心がけていたところ、その風流な行いが神仙に感応したのか、偶然にも仙草を食べて天に飛んでいったという話がある。この説話は、この女の行いこそ理想的な母親である

という慈母像が描かれているといえよう。

奈良時代にはこのように理想的な母親としての慈母像が成立する一方で、親子関係がこれまでにないような状況に追い込まれつつあったことも描かれている。

「出拳」という制度によって出世した息子から、母親が稲を借りたが返済できなくなったところ、息子はきびしく督促し返済を迫ったという。すると母親は自分が息子に飲ませた乳の代価を要求し、母と子の縁を切った話がある。この説話では、息子が母親に負債の返済を迫ったことを話題にしているが、すでにこの当時から、母子であつても貸し借りの契約関係が成立すると考える人々が増えつつあったことを示しているといえよう。その背景には、平城京に成立した市場経済の問題や財物の私有化という問題が横たわっているのである。

飛鳥・奈良時代における子育ての特徴

三浦（一九九六）は、律令体制の確立がわが国の親子関係とくに母親の存在をきわめて不安定なものにして

いったことを指摘している。

第一に、六歳になると男女に等しく口分田が与えられ、死ぬまで田祖がかけられたが、土地は一族や一家の所有という觀念が崩壊し、個人のものという觀念が成立したことよつて、それまでの共同体としての家族意識の中に個の意識が生まれてきたことである。このことが親子の間でも稲の貸借をめぐる対立関係を生みだしたのである。女性は子どもが小さいときには慈母としての役割を果たすことを求められ、老いては自分の田祖の分だけは労働することを要求されるようになり、老後を子どもによつて養ってもらえることは必ずしも保障されなくなったのである。

第二に、藤原京や平城京を初めとする都市には、多くの律令官人とその家族たちが生活するようになり、その人たちは命令のままに地方に赴任した。その赴任に当たつては妻と子どもを連れて行つたので、ここに夫婦同居という核家族形態が成立し、都には老いた母親たちが残され、子どもや孫を心配しながら帰京を待ちわびてい

るという姿がみられるようになったことである。それまでの三世同居という家族生活が、都市やその赴任先の町では次第に崩壊していくことになるのである。その中で京に残された母親が遠く離れている娘に対して強い愛着を抱いていたことが示されている。

第三に、飛鳥時代までは家族という生活共同体は三世代が同居して土地を耕すことによつて生活していたので、親子関係や母親と父親の役割は安定していたが、奈良時代になると個人意識や核家族が成立してきて、親子関係が次第に不安定になってきた。そのためにそれまでの古典では描かれなかった母親が子を棄てる話や子が親を棄てたり殺す話が、出現してくるのである。

私は三浦（一九九六）の本から、飛鳥・奈良時代の子育てについて多くのことを学んだように思う。もちろん他の研究からそれを裏付けたり修正していくことが必要なことはいままでもない。しかし律令体制下の平城京の官人の子育ては、まさに平成という現在に生きている我々が直面している姿と重なってくるのである。これは

消費中心の都市生活者という共通の生活形態によつて生みだされる問題なのであろうか。平城京の人々の子育てをもっと詳しく研究した文献を探していきたいと思う。

（東京家政大学）

引用文献

三浦佑之『万葉びとの「家族」誌―律令国家成立の衝撃―』講談社選書メチエ 一九九六年



編集後記

今月の特集は「支える」です。保育だけではなく、さまざまな分野で活躍されている方に「支える」という共通のテーマで書いていただきました。

*

私にとって、幼稚園の送り迎えが、「支える」ということを考えるきっかけになりました。

初めて上の子を入園させたときは、下の子連れて送り迎えをしなければなりません。そして、その間に山のような家事をこなさなければなりません。そんな生活では、下の子が熱でも出したらすくお手上げです。

けれども、周りにいる先輩のお母さんたちに助けられました。困っている私に代わり送り迎えをしてくれたり、迎えに行ったら後もそのままの子を預かってくれたり、さらに夕方の方が家まで送り届けてくれる方もありました。最初のころ、私はそのような親切に戸惑いました。当時の私には同じようにお返しができる余裕がないことが明らかでした。そんなとき、どの人も気軽に「私もそうだった（上の子のときは助けられた）」のよ」と言うのでした。その一言は、私の気持ちを随分楽にしました。今はこの人たちに助けらるばかりでも、下の子が入園するころになって、別の困っている人の助けになることができるのならそれでいいのだと、思えるようになってきました。

(A)

幼児の教育

第九十八巻 第六号

(一九九九年六月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十一年六月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五丁目二

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

〒〇三―五三九五―六六一三(営業)

〒〇三―五三九五―六六〇四(編集)

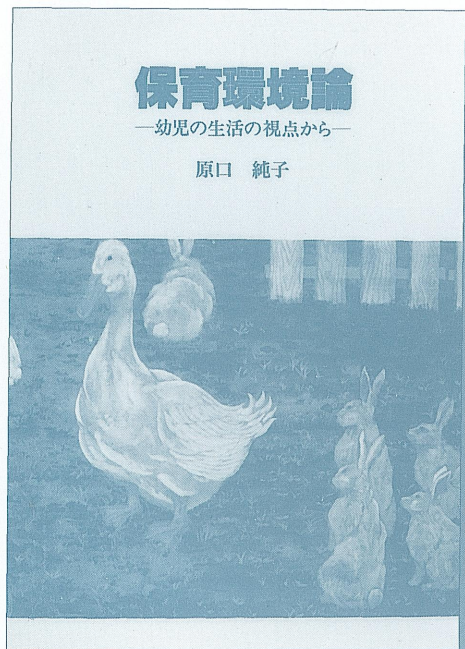
振替 〇〇一九〇―二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

保育環境論

— 幼児の生活の視点から —



幼児を取り巻く保育環境の具体的な事柄について、“幼児にとってそれは何であるか”の視点からとらえようとしたもの。

粘土や折り紙などの教材から一クラスの人数、園舎の構造などまで幼児の目、心、身になって見直し、環境が幼児の経験内容の質を左右することを明らかにします。

発売中

好評既刊本!

原口純子 著

A5判 176頁 定価：本体1,600円+税

キンダーブックの
フレーベル館

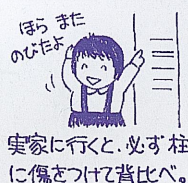
漫画でつづる

最新刊

「幼児の教育」
連載の
単行本化!

共働き夫婦の ドタバタ育児日記

個人的な育児にまつわるできごとが、子育て奮闘中のお母さん方の笑いと共感をよぶのびのび育児日記。保育者にも、育児中の母親がどんなことに喜び、不安を感じるのかがわかり、母親対応のコツがつかめる本として活用できます。



佐藤和代 著

B6変型判 208頁 定価：本体1,200円+税

キンダーブックの
フレール館